「ヒョンヒョロ」で里帰りしよう！

法学部１回生　三上貴生

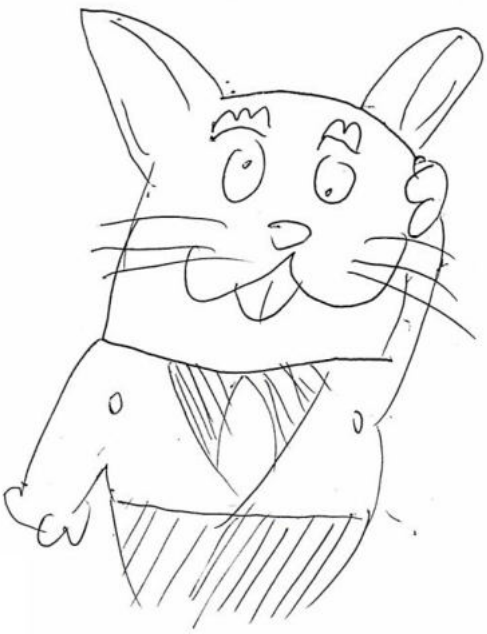
子供のころ、おばあちゃんの家にあった「ドラえもん」を夢中になって読んでいた。コンビニでベスト版を見つけるたび買ってもらったし、ちょうど同時期に出版され始めた「ドラえもん プラス」や漫画版大長編の総集編も集めていた。そんなに夢中だったのに、大抵の子供に起こることではあるのだけれど、一時にしろ「卒業」の時はやって来る。スーパー戦隊は「デカレンジャー」で卒業だし、仮面ライダーも「龍騎」「555」「剣」は夢中で見たのに「響鬼」で離れてしまった。作品自体は年齢を問わない深みがある傑作なのに、どうしてもそういうマセた気分になってしまうのだ。

「仮面ライダー」には「ディケイド」から復帰したのだが、藤子作品に復帰（とはいえかなりライトなファン、いやフェザー、もしかしたらモスキート級？）したのはまさにこの「ヒョンヒョロ」からだった。詳しいことは覚えていないが「マクガフィン」という言葉の意味が気になって調べていたところ、wikipedia でその代表例として挙げられていたのが発端だったことは覚えている。(ちなみに今ではその記述は削除されている。さみしい。)

あらすじはシンプルなもので、小さな男の子のマーちゃんが「ヒョンヒョロをください　くださらないと誘拐するてす　マーちゃんどの」と書かれた手紙を持ち帰り、両親は本気にしなかったが差出人のウサギ型宇宙人が実際に現れ、人々はパニックになる…というものだ。ここでオチについて書くような無粋な真似はもちろんしない。

最後までヒョンヒョロが何なのかは全く明かされず、なぜ宇宙人が欲しがっているのかも当然理解不能である。しかし宇宙人はそんな地球人の思いなど知る由もなくひたすらにヒョンヒョロを要求するばかりである。攻撃で排除しようにも「次元が違う」という途方もない理由で通用せず、代わりの品で勘弁してもらおうにも聞き入れてくれない。

「ヒョンヒョロ」という奇妙な語感も無敵の宇宙人が身代金誘拐を企んでくるという理不尽さも（あと宇宙人の愛らしいようでいてイカレてるようにしか見えない目つき顔つきも）ポイントだが、真に恐ろしいのはこの「聞く耳持たない」という部分である。「グロさ」「エグさ」などなくても十分に恐怖は演出できるのだと僕はこの作品から学んだ。詳しくは実際に読んでみてほしい、というしかないのだが、「ドラえもん」などで見知った親しみやすく愛らしい絵柄でああまで一方通行な会話を描写されると笑い事ではなくゾっとする。

なぜこの宇宙人が「聞く耳持たない」のか、それは「ヒョンヒョロ」の価値を自明であると確信しているからに他ならない。地球人からすれば無茶苦茶な話だが、私たちの誰がこの宇宙人のような行いをしたことがない、今後もしないと言い切れるだろうか？自明な価値とは何か？そういう風刺が描かれている。そしてその毒気が藤子先生作品に対する興味を復活させ、他作品にも潜む毒の深みに気づかせてくれたのだった。

褒めちぎりはしたものの、この「ヒョンヒョロ」が藤子先生の最高傑作とか本領とか決めつけるつもりはない。あくまでも「子供のころとはまた違った角度から見る藤子・F・不二雄」の入門として自分の体験から薦めているだけである。「あの日見た『ドラえもん』トラウマエピソード」の源泉を垣間見るようで一風変わった感慨が得られることうけあいである。